

「おやとさー」の言葉があります。道で知り合いの人ひとが声を掛けあい、また別れる時も「おやとさー」と一声軽く頭を下げながら去っていく光景なのです。それが親しい人びとの間では朝夕区別なく使われているのです。母に「おやとさー」の言葉の意味を聞くと「御苦労様」ということだと教えてくれました。しかし住み慣れ、聞きなれるに従って、「御苦労様」という一言の色ではない言葉、文化性では言い表せないものを感じたのです。

鹿児島島のシラス地帯で不毛で米も少なく、いもや雑穀を主食として暮らすには決して豊かと言えなかつた風土と歴史の中から、人が互いに生きて行く上でいたわりと、励ましの思いやりのある言葉であったのです。

在郷の間に私もいつとはなしに「おやとさー」の挨拶ができるようになりました。しかし根なし草の満州坊主には言葉の真似だけで、時と場所、相手などに合わせて心にひびいてくる根づいた「おやとさー」は、使えませんでした。

故郷を逃げ出し、外地と雰囲気の合う生活を求めて上京し三十余年、青春を共にした故郷の友達からふと電話

で「おやとさー」と呼びかけられたり、会って語り合うときなど、そのすばらしさを今頃感じつつも心にへだたりを重く感じていきます。一つの言葉が持つその文化性、土着性に対して第三者的立場、異邦人としての宿命のようなものを意識しています。最近の流行語になっている日本人の国際人化という言葉には新しい型の根なし草を生み出すのではないかと危惧を持っています。

## 中共、強制抑留の思い出

宮城県 相馬 勉

昭和二十年八月、ソ連軍北滿に侵攻してきたとき、私はハルビン機関区に在勤しており、安東方面派遣要員として自宅に待機していたが、安東・牡丹江方面の戦況が悪化し中止となった。その後、ハルビン地区も緊迫した状況となり、自宅前にはざん壕が掘られ、軍より手榴弾が支給され、家族自決用として毒薬を準備し、死を覚悟してソ連軍の来襲に備え八月十五日終戦を迎えた。

ハルビン鉄道局の指示で、列車運行に協力しながらソ連軍の進駐、接収、引き渡し準備をし、ハルビン市在住の日本人同士で難民収容所を確保し、北滿より引揚げてきた人達に食料、医療等を与え、救済活動に協力した。最初に難民収容所に行つて見たときには言語に絶する惨たんたる有様で、栄養失調、発疹チフス等発生し、死亡者続出する状態で、死亡者を荷馬車に横積みにして搬出されるのが見受けられた。

収容所内に栗原郡出身の拉林開拓団の人達がおり、その中に妹が子ども二人連れてきていたので、自宅に引取り手当をしたが、栄養失調で死亡させてしまった。鉄道自警村から、妻の姉も二人の子どもを連れてきたが、早目にわかつたので、引取り、元気で日本に帰国させることができた。又、自宅に多数の知人を連れてきて風呂に入れ、食事を与えて元気つけた。ソ連軍が到着してから、職場から開放されたと思っていたが、ソ連軍の命令と中国側の要求で作業を続行することになった。

二十一年、一般日本人の帰国が近づいてから、政治工作員が接触してきて、内戦中の八路军に協力するように

言ってきたが、彼らの要求を聞き入れなかった。

日本人の帰国が終わる頃、東北鐵路総局より留用の通告を受け、これを拒否したが、生命財産を保護するというので、帰国する日本人から切り離され、八路军の警備兵つきで他の場所に移転、旧滿鉄社宅に家族全員収容された。

ハルビン市南方の第二松花江まで国民党軍が迫ってきたので、留用になった滿鉄社員と突然合流させられて行く先も知らされずに列車でハルビンを出発し、横道河子を通り、牡丹江市に到着、しばらくそのまま列車内で生活を続けた。牡丹江市の状況はハルビンで聞いていたが、日本人の住宅はほとんど破壊、焼失しており、鉄道線路の両側には、遺骨が散乱しているのが見られた。牡丹江鉄道局は全員自決と聞いていたので、同局跡を尋ねてみたが、中国人の話では、全員列車で他の日本人といっしょに脱出したというので、伯父が在職しており安心した。

二十一年十二月、牡丹江鐵路工廠に配属になり、住宅を与えられたが、嚴寒時であり、破壊された家屋であつ

たので、付近の家屋から窓、畳、等を取りはずし、修理し、「ペーチカ」等作りながら牡丹江鐵路工廠の復活作業を開始した。

二十二年六月、安東、図們方面から元滿鉄社員、一般日本人、生活物資調達関係の人、及び特殊教育指導（政治工作員）の人等合流して行動を共にし、当局の指示にしたがい、輸送力の増強を計り、速かに破壊された工場、家屋の修復、ソ連軍に持ち去られた後の機械設備の整備、及び破損した車両（主に蒸気機関車）修理復元等各専門別に分担、日本人が主体となり、中国人といっしょに苦業を共にしながら作業を進めた。輸送力の増強が最大の目標となっており、設備不良、悪条件の個所での労働、睡眠時間も一日に二、三時間で、不眠不休という状態の日がしばらく続いた。またこれら苦難を克服する方法に、思想啓蒙がいろいろな方法で行われて、能率の向上を図られた。

また、私生活の面でも給与は現物支給で、はなはだ粗悪な食事。野草など採取し、魚を釣ってきて栄養補給をした。これがそうとうな期間続いた。内戦は中共軍に有

利に進み、抑留中最も苦勞した時期であった。栄養失調、病氣等で死亡した人もいた。

野菜を栽培し、ムシロを織り等の内職をするようになり、給与が現金支給されるようになって、わずかではあるが私生活は向上し、安定するようになった。復旧作業も順調に進み、気分的に幾分余裕ができてきたので、余暇を利用して、野球、バスケットボール、音楽等の娯楽、たのしみ、一時たりと望郷の念を忘れることができた。

北支、南支方面が中共軍によって解放され、二十五年十月、北京交通部鐵路総局に移管されたので、天津市に移転し、交通部の指示を待った。その間、中共政府に代表を送り、帰国交渉を再三行ったが入れられず、政治工作員を除き、石家荘、太原、漢口等各方面に分散配属になり、私は山西省太原鐵路工廠に配属、生産計画課で車両整備の作業計画を担当した。中国での最終の仕事となった。抑留中の苦しみは、戦時中以上の苦勞がともなったが、中国側から実績を評価され、感謝されて、家族全員、元気で二十八年三月、白山丸で帰国した。